ほない歴史通信

第２６号

2003.3.1

原点をみつめる

観光とは読んで字の如く〃光(ひかり)を観(み)る〃である。つまり、観光地というのは光輝いている土地のことを指すのである。そこではいったい何が光を発し、なぜ輝いているのかを観に来る人々を一般的には観光客と呼ぶ。

しかしその光輝き方の歴史と背景は千差万別である。

ある時期に急に話題をよびブームを巻き起こすような所もあれば、じっくりと長い歳月をかけて人々に支持されて今がある所もある。そのなかで二・三の例をあげると、歴史的背景を持つ史跡、訪れた人が思わず絶賛するような名勝地、また見る人をして畏敬の念を抱かせるような天然記念物等は日本という風土のなかでの観光の最たるものであろう。

従来、日本には観光の定義や概念はなく、神社参拝や寺院巡礼の信者、花見や紅葉狩り等の行楽客と前述のような土地柄が結びついて観光地となりそこに集まる人たち即ち観光客を引きつけたのである。

またその集客方法にはいくつかのパターンがある。なかでも自然景観や文化財としての史跡・名勝・天然記念物等を最大限に活用した観光客の誘致、それと神社の祭礼や縁日、寺院のご開帳や秘宝公開など人為的な集客、加えて温泉や話題性のある歓楽街の遊行など、この三者がうまく結びつけばそこに集まる観光客の増加は大いに期待できよう。

しかしここで最も大事な事は、いわゆる観光地と呼ばれている土地柄に根付き、そこに親子幾代にもわたって住みついている人たち、言い換えれば、あらゆる地元のことを知り尽している人々が一番にひかり輝いていなければならないということである。

そこに住む人たちが自分の地元の観光地を愛着を持って大切に思い、大事にするという極めて平凡な事がらである。それを自からが否定したり拒否するようなことがあれば、そこは足元から崩れるということになりかねない。一過性のお客さんは興味を示したり感嘆はするけれども、ただそれだけのことであり責任はもってくれない。

全国三千余の市町村、大かれ小なかれ何処でも観光開発や観光地の整備等をして不特定多数であろう観光客の誘致に熱心である。そうすれば当然、表現は適切でないかもしれないが、日本という限られた枠のなかでの観光客というパイの奪い合いということになる。

そうなってくると必然的に、各自治体の内から負け組と勝ち残り組とが出てくる。とすればやはりその場所を光り輝かせ、それを維持し続けるためには、そこに住みそこに係わる人たちが主役となっての熱意と創意工夫、アイデアの勝負ということになるのであろうか。先行きの見えない長い正念場が続いているような気がしてならない。

（吉成）

【ふるさと写真帳】　熊野神社

大子から馬頭に通ずる街道を行き、道をそれて左貫へ通ずる道を行くと、初原地区に入る。この初原の里をしばらく北上すると、やがてあと三百メートル程で左貫地区というところに熊野神社という小さな社がある。

初原には、抱き灯籠の杉で有名な鹿島神社があるが、この熊野神社は小規模な神社で、もともとはその地区に住む藤田氏の氏神であった。

現在では阿坪というこのあたりの地区の人々が管理している。

二アールほどの敷地の中心に、樹齢数百年と思われる銀杏の大木が聳えている。幹の周囲は約四メートルもあり、気根が下がっている程の大木である。

その銀杏の木の下に小さい社が三つ並んでいる。熊野神社・稲荷神社などである。

昭和十三年に新しく造営されたもので、それ以前は藤田家の氏神が祭ってあっただけだった。新しく造営されたのは一個人の寄附によるものであった。この寄附については、大子町の茶の発展にも幾分関係がある。

江戸時代の嘉永三年、大子のお茶の先駆者である初原の藤田文次郎は、茶の製法の改良により、藩主斉昭公より褒状や三つ葉葵の紋の入った短刀などを頂いている。その孫の藤田勇太郎も茶の製法改良に熱心であった。

明治二十七年勇太郎方に県の公立製茶伝習所が設けられた。静岡県より技師を招聘して、製茶法の伝習に努めたが、間もなく明治三十年に同伝習所は廃止された。

製茶法改良を心がけていた勇太郎は、公立伝習所の廃止にもめげず、それならばと私立の伝習所を設けて研究を進めることにした。自費で技師を招聘し、研究を進め、地方の青年を集めて伝習に努めた。更に、当時盛んになりつつあった、機械製茶の有利なことに着目し、多大の私費を投じて高額だった製茶機を購入し、その上自らも製茶工場を設置、機械の研究、工夫改良に努めた。工場の動力源として、水車を利用したのだが、製茶機に動力を伝えるベルトの改良にも苦心したといわれている。様々な材料を使って実験を重ねたが、なかなか思う様にはいかなかったようである。勇太郎の製茶に対する熱意は、飽くことなく改良を

続けた。しかしそのため借財が重なり、遂に家産を傾ける結果となってしまった。こうして多くの田畑を失い、事業を続けることは不可能となった。勇太郎は涙をのんで事業を中止ざるを得なかったのである。

勇太郎の子息芳雄には一家の生活が双肩にかかり、家族を支えるべく働かなければならなかった。若くして再興の、意気に燃えていた芳雄は、家運を挽回せんと志し、大阪に出て洋傘鉄骨製造会社の職工となった。芳雄は骨身を惜しまず懸命に働いた。やがてその努力と勤勉さは社長の認めるところとなり、同社の後継者となった。

昭和十三年になって、この芳雄は、郷里の熊野神社は、もともと同氏の家の氏神であったことから、社殿を新しく造営しようと寄進したものである。当時の「いはらき新聞」記事によると、芳雄は、資産数一〇万と称される成功者と報じられている。この社殿造営に当たっては、金千円を寄付したと、写真入りで大きく報道されている。

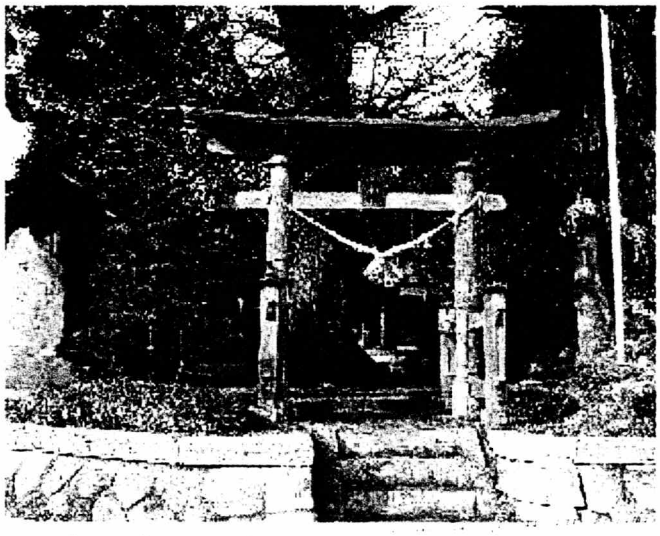
昭和十三年当時、玄米一石の値段が三十四円位であったから、千円ではおよそ三十石の玄米が買えることになる。当時にしてみればかなりの額であったと思われる。

社殿は旧道沿いにあったが、これ以前に新たに県道が開通したので、社殿造営と同時に、新県道に通ずる約八〇メートルほどの参道を造った。更に「熊野神社」という立派な石碑も建立したので、熊野神社は面目を一新した。

阿坪地区の人々はこの神殿の竣工を喜んで、盛大な祭りを催した。こうして芳雄は家産を傾けた父の名誉を回復し、故郷に錦を飾ったのである。「身体髪膚之を父母に受く敢えて毀傷せざるは孝の初めなり。身を立て道を行い名を後世に揚げ以て父母を顕わすは孝の終わりなり。」（孝経）と言われるように、まさに後世に名を揚げて、親に孝行をしたのである。

今はこの社もやや古びてきているが、地区の人々の努力で整備管理されている。毎年祭りも行われ、親の名誉を護った芳雄の孝心を後世に伝えている。

昭和十三年当時は、日中戦争が始まり、国を挙げて軍国主義が盛んになってきた時代である。やがて太平洋戦争に発展し、学校でも神国日本という様な教育方針になり、小学生も神社の清掃や、参拝をした。この小さい神社も月に一度、小学生の手できれいに掃き清められていた。



各地に古くから信仰されていた寺社があるが、最近では顧みられなくなり、中には朽ち果ててしまうものもある。小さくとも、どの寺社にも当時の人々の思いや歴史がある。

信仰という意味だけでなく、郷土の歴史あるいは文化財として、できるだけ大事にして残したいものである。（石井）

久慈川の漁（一一）

大森政夫

▼ナワバリ漁

ナワバリ漁は、秋産卵間近い落ち鮎の習性をとらえて、群れる鮎へ投網をかけて捕る漁法である。

秋になると、川幅に一定間隔で木杭を打つ。杭を支えにして竹笹で川を遮る。川の流れは、竹笹のすき間から流れるので、杭が押し流されることはまずない。コレを「ナワバリ」と呼んでいる。

和田さんは、ナワバリについて語った。

「むかし、下流の山方町辺で見かけたナワバリは、川幅に打った杭と杭との間に縄にたるみをもたせて張ってあった。縄は流れに動かされてパタパタと音をたてていた。もしかすると、縄は鮎威しの役目で、これをナワバリ（縄張り）と言ったのかも知れない。この辺（当地）では、見かけたことはない。」

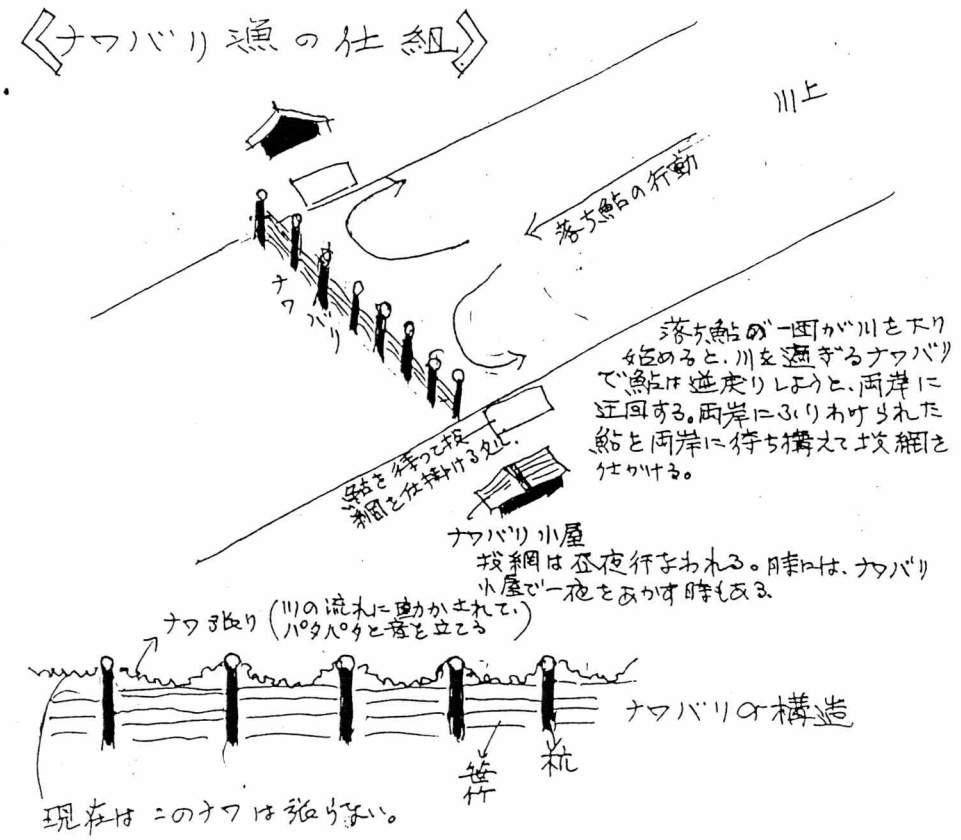
落ち鮎は、ナワバリに遮られて、久慈川を下ることができないので、両岸にふり分けたように寄ってくる。

「最初に下ってきた落ち鮎の一群は、数が少ないので漁に慣れた人は、見逃す。次にやってくる大群に投網をかける。」と

まさに「一網打尽」で長年の経験から、鮎の習性をみごとにとらへたものである。

長年の経験と言えば、現場に漁を見に行ったときのことであった。網を持ってじっと川面を見ていて「来た！」と言った。鮎の一群が岸へ寄ってきたことを指差して教えてくれたのであったが、私には全然見えなかった。

「ときには、背負い籠一杯落ち鮎を捕ったときもあった」と和田さんは語った。



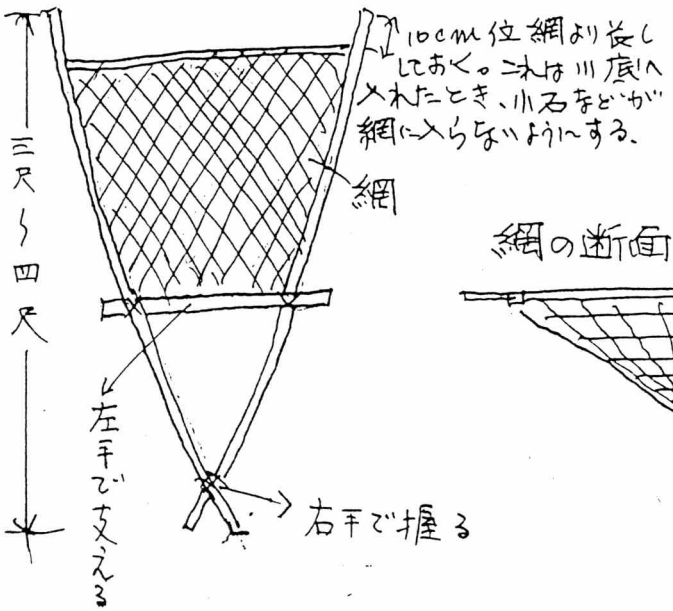
▼待ち網漁

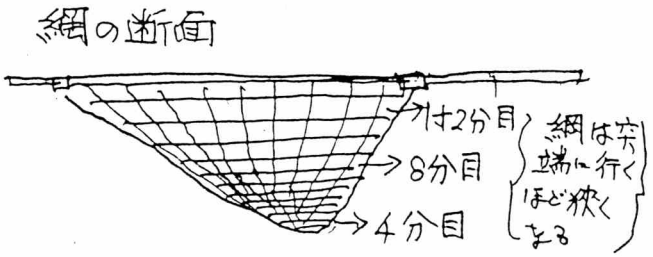
この漁は腕の力と勇気が必要だと言う。まちがえれば、網もろとも急流に押し流されて、一命を失う危険性を秘めているといわれ、川をじゅうぶんしりつくした人が行なう漁法だ。

雨が降って川が増水したとき、また、水が引くときをねらって、早瀬に腰までつかり、三尺四方もある「すくい網」を流れに逆らって、両手で沈める。袋状になった網を、二・三分ごとに沈めたり、引き上げたりして魚を網へ救い入れるのである。危険いっぱいだが種々雑多の魚が入り、量も多いようだ。

待ち網漁で捕れる魚は落鮎やうなぎ、鯉その他雑漁である。

待ち網の大きさは、使う人の力量によって異る。





奥久慈の木地師（二）

鈴木三郎

庄治衛門は木地漆器生産事業の基盤を整備するとともに、水戸藩との原木手当交渉を成功させ、原木の所在地たる八溝山中に、木地挽師、そげ師等先山組を配置する一方、屋敷内には木地倉をはじめ各種作業舎、製品倉庫等を施設して製品完成の場とした。つまり八溝山中で、ケヤキ、ブナ、トチノ木、ミネバリ、クリ等の優良木より生産した未完製品を屋敷内に搬入し、木地製品の最終仕上げ、うるし塗作業等を実施したのである。

完成した製品は予め水戸城下に開設した店舗において販売した。当時は水戸藩内にはこうした「日々共用品」の生産は他にみられなかったこともあってか、それなりの収益があり事業は成功したごとくである。このことは、木地製造初代庄治衛門が水戸藩へ「製品の逸品を献上した」とか、二代目庄次エ門が、「元治甲子の水戸内乱時に水戸藩へ軍用金として金弐百両を献納した」等の文言が記されている菊池家文書（二代目庄次エ門）によってもうかがわれる。

菊池家の木地・漆器製造事業は明治に入ると間もなく廃業している。成功したにもかかわらず比較的早期に廃業しているがその理由については語り継がれていない。敢えて考察すれば次のようなことが考えられる。

(1)、後継者職人育成の問題か、

(2)、財政的不具合を生じたものか、

(3)、明治維新による諸制度刷新によるものか、

(1)の後継者職人育成の問題であるが、

菊池家は塗座元を天保八年頃に開設しているから創設約三十年で明治維新を迎えている。開設時の職人の年齢は定かでないが、当時までに熟練の域に達した人達の集団と想像されるからこの時はすでに物故者がでるなどかなりの老齢化は否めない、とするとこの間における後継者育成が問題視される。特殊技術者の養成であるから困難だったのかも知れない。

(2)の財政的不具合を生じたものか、

塗座元開設以来二度火災にあっているが、二度目の罹災後がもんだいである。（二回とも不審火の疑いがもたれているとのよし）

初回の罹災は天保十年頃のことで、当日はあまり遠くない場所に祭礼があり、家人がほとんど出払ったときに長屋から火が出て、長屋は勿論本居宅まで全焼してしまった。いわゆる「原因不明の昼火事なり」と伝えられているとのよし。この火災後は間もなく本居宅、長屋その他の再建をみている。

二度目の罹災は慶応の初期で、この時は祭礼こそなかったものの天保時と同じように真昼に長屋から出火し本宅まで類焼したものだが、この時は天保時の事後処理と異なって完全復興には数年を要し明治五年に完成した。しかも過去二回の罹災原因を考慮し、長屋の再建は見合わせ本居宅も規模を縮小して建築したと伝えられている。

水戸内乱に際して金弐百両の歳出があった直後のことだから財政に不具合を生じたとしてもうなずけることである。

(3)の明治維新による諸制度刷新の関連によるものか

江戸幕府崩壊を頂点とする大変革がなされたことでもあり、この種の事業続行にも改変が及んだことと思われる。一例を挙げれば八溝山地籍についても藩所有林の大半が国有移行になるなどで原木手当てにも支障がでたかも知れない。

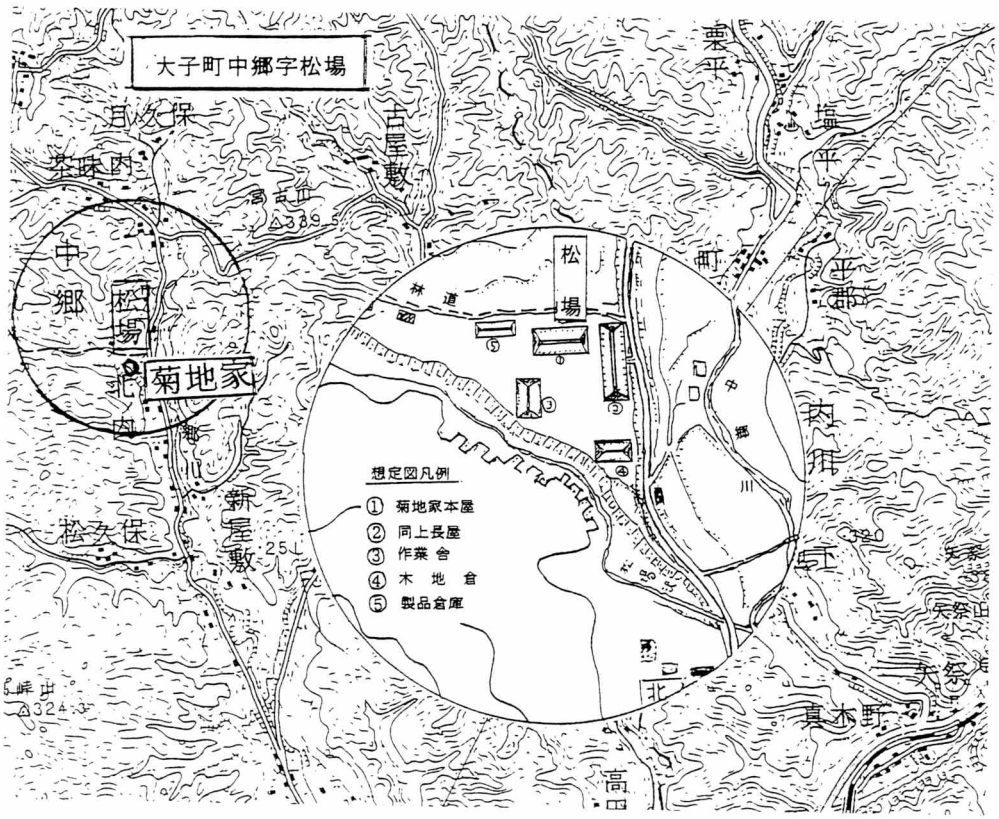
廃業に至った真実は不明だがまづ以上のようなことが想定される。これらを含めた諸々の事情が複合関連の結果、廃業されたものと考えられる。

ものの本にも『ここの塗物は幕末から明治初年頃までは作られていたようだが、会津から水戸藩入りした塗師、木そげ師等はどうなったものか行方は捉めない。木地師千治郎一家はその後も八溝山系を転々としながら昭和三十年代頃まで木地業を継続した』と見られるのみである。

この千治郎とは現大字上野宮居住大蔵家の奥久慈入山初代仙次郎を指すものと思われる。

寛延四未上ノ宮村御立山吟味役宮本長五良掛ニテ木地挽取立會津表より職人呼細工為致候所宝暦三酉十一月止ル

「常陸国北郡里程間数之記」の一部分



【史料紹介】歴代村長の足跡（上）

池田小学校の昭和22～47年度「学校沿革誌」には、昭和29年10月17日の袋田村役場新庁舎新築落成に当り、第19代村長岡村裕が書き記した「歴代村長の事蹟」が綴られているので紹介しよう。

初代　鰹木穆

旧水戸藩の士族鰹木兵衛門の三男に生れ、廃藩置県により明治初年袋田に来り、塾生を募り龍泰院にて子弟の教養に努めて居られたが、明治五年学制発布により現在の袋田小学校敷地内に在った二階建の校舎で最初の学校教育を初められた。その初代校長として氏を迎へ、池田を除く旧五ケ村の兼帯戸長を勤め校長を兼ねて二階建の一棟の内に戸長役場と学校が置かれた。明治二十二年三月十五日現在の六大字である袋田・下津原・南田気・久野瀬・北田気・池田の旧六ケ村が合併して袋田村が誕生し、その初代村長として同氏が就職したのである。本村の歴代村長の内、桜岡敏氏、益子祐次氏、桜岡伴次郎氏、佐藤新之介氏、桜岡力氏の諸氏は皆鰹木先生の教化を受け、その節操と風格は相通ずる点が多い。

2・6代村長　桜岡敏

大子・太田線の県道開設工事中難工事として今なお生瀬村との交通の要路をなす隧道は、実に氏が県会議員在職中に竣工されたものである。・・・旧役場庁舎は、氏の村長在職中にその資材を寄附して新築した・・また産業の開発に、その敏腕を振はれた。中でもその業績の最たるものは、久慈郡産馬組合の創設で、初代の組合長となり、馬匹の改良に意を用いられ、・・・また、教育の面にも力を注がれ、校舎二棟を寄附されて居る。

3代村長　益子祐次

日清戦争の国家多事の時、村行政に奔走された。今日、袋田中学校が大字北田気地内広林に建設されたが、氏は四十年前にこの地に村内の学校を集め、一村一校主義を称えられた・・・また大子町との合併を提唱し、当時の理事者に進言された。

4・14代村長　桜岡伴次郎

大子農学校が組合立から郡立への昇格運動に奔走せられた。又産業方面には信用組合を設立、初代組合長として農家経済の運営に尽力せられた。昭和三年昭和橋（下津原）、池田橋の二橋を架設する。

5代村長　佐藤新之介

温厚篤実の性格は衆望を集めた。

7代村長　桜岡亀吉

二十代の少壮村長として、その颯爽たる風貌は、貴公子然とした。

8代村長　石田潤之介

日露戦争の始まった非常の時、潮来町より招かれて理事者の職についた。

9代村長　桜岡水之介

日露戦後の財界不況の時に、袋田小学校の新築の議起り、加ふるに数年間にわたり伝染病の発生等により村財政多難な時、その難を排して小学校舎新築を計画し、多年の懸案を実現した。

10代村長　桜岡力

水郡線布設の功労者で、本日氏の邸宅の側に袋田駅ができておることも決して偶然ではあるまい。厳格な性格の持ち主で、計画したことはあくまでやり通す主義で、水郡線の開設にはその実現するまで運動を怠らなかったと言ふ。また、中学校建築の財源に当てられた後沢林村有林の買い入れも、氏の在職中に計画されたもので、村政百年の計をたてられたのである。

（野内）

編集人　斎藤典生（茨城大学人文学部）
野内正美（茨城県立歴史館）
石井喜志夫（元教員）
小澤圀彦（大子町教育長）
吉成英文（大子町社会教育課）
井上和司（大子町税務課）

編集発行　遊中史の会
大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町大字池田二六六九番地
〒三一九-三五二　TEL〇二九七-二-二六七